

デーヴォ ガイド



2022.3.28-4.3

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディポジションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディポジションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?) 1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?

24:1 週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。
 24:2 見ると、石が墓からわきまにころがしてあった。
 24:3 はいって見ると、主イエスのからだはなかった。
 24:4 そのため女たちが途方にくれていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くにきた。
 24:5 恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。
 24:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。
 24:7 人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」
 24:8 女たちはイエスのみことばを思い出した。
 24:9 そして、墓から戻って、十一弟子とそのほかの人たち全部に、一部始終を報告した。
 24:10 この女たちは、マグダラのマリヤとヨハンナとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。
 24:11 ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。
 24:12 [しかしペテロは、立ち上がると走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ、亜麻布だけがあった。それで、この出来事に驚いて家に帰った。]

弟子たちでさえ復活を信じるのができませんでした。人は死の前には希望を持つこともできないほど無力なのです。しかし主イエスは人類の初穂としてよみがえりました。

復活は事実であるから力があります。弟子たちの内面の希望という程度であるなら、誰もその希望を持つことができないからです。信じるのができなくても、事実を見ることはできます。それは歴史的に記録が残されている事実です。それが復活の信仰なのです。

そしてその事実の上に、私たちの希望は成り立っています。私たちの身代わりに死んでよみがえったということは、私たちが同じようになるということだからです。

永遠のいのちの希望を持ち続けましょう。それが人に伝わるような生き方をしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



29日 火曜

ルカ

24:13 ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。

24:14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。

24:15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。

24:16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。

24:17 イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。

24:18 クレオパというほうが答えて言った。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」

24:19 イエスが、「どんな事ですか。」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。

24:20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。

24:21 しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になります、

24:22 また仲間の女たちが私たちが驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみました、



24:23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。

24:24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」

24:25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。

24:26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」

24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

イエス様がおられたのに彼らはそれに気づきませんでした。イエス様の出来事を聖書を通して見ていなかったからです。私たち自身にも様々な出来事がありますが、それらを聖書によって見なければ、本質を見誤ってしまいますから、注意しましょう。デボーションの中で、すなわち祈りと御言葉によって、主から教えていただくことです。特に大切なのはイエス様との関係です。「イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」とあるように、聖書はイエス様のことが書かれているのです。イエス様との生きた交わりを喜びつつ、聖書から、自分自身の出来事について、御心を教えていただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



30日 水曜

ルカ



24:28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。
24:29 それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ時刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。
24:30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。
24:31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。
24:32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」
24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、
24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。
24:35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。
24:36 これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真中に立たれた。
24:37 彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。
24:38 すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。」
24:39 わたしの手やわたしの足を見なさい。

まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」

24:40 [本節欠如]

24:41 それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか。」と言われた。

24:42 それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、

24:43 イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。

なぜ彼らがイエス様を見ながら分らなかったのかは不明です。しかしパンを取って祝福する行為はイエス様の様子を思い出させると思われますから、最後の晩餐のような霊的な行為に聖霊様が働かれたのでしょう。人に善き気づきを与えるのは聖霊ですが、聖霊に働いていただけるような行為をするのは人間です。

どんなことも聖霊によらなければ力も恵もありませんから、聖霊を求めるためにできるだけのことをしましょう。

イエス様がよみがえったことは、弟子たちでさえ信じられなかったほどの驚きでした。ですから彼らの信仰は心の内に始まった主観や想像によるのではなく、事実によっているのです。祈りに答えてくださった事実や、聖徒の証しの事実を受け取りましょう。

何よりも自分を救いによって変えてくださった事実を感謝して受け止めましょう。そして復活の信仰を堅く持ち、死に勝利した主の力によって、どんな時にも希望を持ち続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



31日 木曜

ルカ



24:44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就することでした。」

24:45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、

24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

24:48 あなたがたは、これらのことの証人です。

24:49 さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

24:50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。

24:51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。

24:52 彼らは、非常な喜びを抱いてエルサレムに帰り、

24:53 いつも宮にいて神をほめたたえていた。

イエス様の復活は歴史的資料から見ても、事実として扱われます。また弟子たちの心理から見ても、ローマ帝国の対応から見ても否定できないものです。そしてそれは単に死人が生き返ったという以上の意味があるのです。

それは「モーセの律法と預言と詩篇」が成就した

ということです。また「罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」ために不可欠なことだったのです。私たちの信仰の希望がイエス様の復活にあることを、もう一度心に深く留めましょう。

弟子たちにとっても死に対する勝利は非常な喜びでした。しかし復活は単に喜びだけではなく、「証人」となるべく与えられた希望でもあるのです。私たちも復活の証人でありましょう。死に打ち勝った信仰のすばらしさを伝えましょう。サタンに打ち勝った主の恵よって、自分にも与えられた勝利を誰かに伝えましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



1日 金曜

エズラ

1:1 ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のこぼを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。

1:2 「ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。』」

1:3 あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その神はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。

1:4 残る者はみな、その者を援助するようにせよ。どこに寄留しているにしても、その所から、その土地の人々が、エルサレムにある神の宮のために進んでささげるささげ物のほか、銀、金、財貨、家畜をもって援助せよ。』」

1:5 そこで、ユダとベニヤミンの一族のかしらたち、祭司たち、レビ人たち、すなわち、神にその霊を奮い立たされた者はみな、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行くとう立ち上がった。

1:6 彼らの回りの人々はみな、銀の器具、金、財貨、家畜、えりすぐりの品々、そのほか進んでささげるあらゆるささげ物をもって彼らを力づけた。

1:7 クロス王は、ネブカデネザルがエルサレムから持って来て、自分の神々の宮に置いていた主の宮の用具を運び出した。



1:8 すなわち、ペルシヤの王クロスは宝庫係ミテレダテに命じてこれを取り出し、その数を調べさせ、それをユダの君主シェシュバツアルに渡した。

1:9 その数は次のとおりであった。金の皿三十、銀の皿一千、香炉二十九、

1:10 金の鉢三十、二級品の銀の鉢四百十、その他の用具一千。

1:11 金、銀の用具は全部で五千四百あった。捕囚の民がバビロンからエルサレムに連れて来られたとき、シェシュバツアルはこれらの物をみないっしょに携えて上った。

イスラエルは神様の警告を無視して従わず、預言の通りアッシリヤとバビロニアに滅ぼされ、捕囚として連れ去られました。しかし神様はイスラエルを完全に捨てたまわず、エレミヤに預言を託し「(29:10) …バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。」と約束なさいました。

当初はバビロニアのネブカデネザル王の権力があまりに大きく、それは不可能と思いましたが、その後クロス王がバビロニアを倒して支配者となるという、考えてもいなかったことが起こったのです。そしてこの王は支配した民族に対して寛容な政治をし、さらにイスラエルに対しては神殿の再建まで指示したのです。

主のみこころは不可能と思えることまでも、可能にして成就します。さらには敵であった支配者までも変えて、ことを行わせてくださるのです。すべては主の御手の中にあります。

さらにクロス王は、かつてバビロニア王・ネブカデネザルによって奪われたものまで、イスラエルに返して、神殿再建に充てるようにしてくれました。主が働かれてその時が来るなら、あらゆることが好転して用いられるようになるのです。

もしも不信仰ゆえに苦難のときを過ごしたとしても、主のあわれみを信じて従い、約束をいただき、主の回復に希望を持ちましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



2:1 バビロンの王ネブカデネザルがバビロンに引いて行った捕囚の民で、その捕囚の身から解かれて上り、エルサレムとユダに戻り、めいめい自分の町に戻ったこの州の人々は次のとおりである。

2:2 ゼルバベルといっしょに帰って来た者は、ヨシュア、ネヘミヤ、セラヤ、レエラヤ、モルデカイ、ビルシャン、ミスバル、ビグワイ、レフム、バアナ。イスラエルの民の人数は次のとおりである。2:3 パルオシュ族、二千百七十二名。2:4 シェファテヤ族、三百七十二名。2:5 アラフ族、七百七十五名。2:6 ヨシュアとヨアブの二族からなるパハテ・モアブ族、二千八百十二名。2:7 エラム族、一千二百五十四名。2:8 ザト族、九百四十五名。

2:9 サカイ族、七百六十名。2:10 パニ族、六百四十二名。2:11 ベバイ族、六百二十三名。2:12 アズガデ族、一千二百二十二名。

2:13 アドニカム族、六百六十六名。2:14 ビグワイ族、二千五十六名。2:15 アディン族、四百五十四名。

2:16 ヒゼキヤ族、すなわちアテル族、九十八名。2:17 ベツァイ族、三百二十三名。2:18 ヨラ族、百十二名。2:19 ハシュム族、二百二十三名。2:20 ギバル族、九十五名。2:21 ベツレヘムの人、百二十三名。

2:22 ネットファの人々、五十六名。2:23 アナトテの人々、百二十八名。2:24 アズマベテの人、四十二名。2:25 キルヤテ・アリムと、ケフィラと、ベエロテの人、七百四十三名。2:26 ラマとゲバの人、六百二十一名。

2:27 ミクマスの人々、百二十二名。2:28 ベテルとアイの人々、二百二十三名。2:29 ネボの人、五十二名。2:30 マグビシュ族、百五十六名。2:31 別のエラム族、一千二百五十四名。2:32 ハリム族、三百二十名。2:33 ロデと、ハディデと、オノの人、七百二十五名。2:34 エリコの人、三百四十五名。2:35 セナアの人、三千六百三十名。2:36 祭司は、ヨシュアの家系のエダヤ族、九百七十三名。2:37 イメル族、一千五十二名。

2:38 パシュル族、一千二百四十七名。2:39 ハリム族、一千七十七名。2:40 レビ人は、ホダブヤ族のヨシュアとカデミエルの二族、七十四名。2:41 歌うたいは、アサフ族、百二十八名。2:42 門衛の人々

は、シャルム族、アテル族、タルモン族、アクブ族、ハティヤ族、ショバイ族、合計百三十九名。

2:43 宮に仕えるしもべたちは、ツィハ族、ハスファ族、タバオテ族、2:44 ケロス族、シアハ族、パドン族、2:45 レバナ族、ハガバ族、アクブ族、2:46 ハガブ族、サルマイ族、ハナン族、2:47 ギデル族、ガハル族、レアヤ族、2:48 レツィン族、ネコダ族、ガザム族、2:49 ウザ族、パセアハ族、ベサイ族、2:50 アスナ族、メウニム族、ネフシム族、2:51 バクブク族、ハクファ族、ハルフル族、2:52 バツルテ族、メヒダ族、ハルシヤ族、2:53 バルコス族、シセラ族、テマフ族、2:54 ネットツィアハ族、ハティファ族。

2:55 ソロモンのしもべたちの子孫は、ソタイ族、ソフェレテ族、ペルダ族、2:56 ヤラ族、ダルコン族、ギデル族、2:57 シェファテヤ族、ハティル族、ポケレテ・ハツェバウム族、アミ族。2:58 宮に仕えるしもべたちと、ソロモンのしもべたちの子孫は、合計三百九十二名。2:59 次の人々は、テル・メラフ、テル・ハルシヤ、ケルブ、アダン、イメルから引き揚げて来たが、自分たちの先祖の家系と血統がイスラエル人であったかどうかを、証明することができなかった。2:60 すなわち、デラヤ族、トビヤ族、ネコダ族、六百五十二名。2:61 祭司の子孫のうちでは、ホバヤ族、コツ族、バルジライ族。・・・このバルジライは、ギルアデ人バルジライの娘のひとりをして妻にめたので、その名をもって呼ばれていた。・・・2:62 これらの人々は、自分たちの系図書きを捜してみたが、見つからなかった。彼らは祭司職を果たす資格がない者とされた。2:63 それで、総督は、ウリムとトンミムを使える祭司が起こるまでは最も聖なるものを食べてはならない、と命じた。2:64 全集団の合計は四万二千三百六十名であった。2:65 このほかに、彼らの男女の奴隷が七千三百三十七名いた。また彼らには男女の歌うたいが二百名いた。2:66 彼らの馬は七百三十六頭。彼らの騾馬は二百四十五頭。2:67 彼らのろくだけは四百三十五頭。ろばは六千七百二十頭であった。2:68 一族のかしらのある者たちは、エルサレムにある主の宮に着いたとき、それをもとの所に建てるために、神の宮のために自

分から進んでささげ物をした。2:69 すなわち、彼らは自分たちでできることとして工事の資金のために金六万一千ダリク、銀五千ミナ、祭司の長服百着をささげた。2:70 こうして、祭司、レビ人、民のある者たち、歌うたい、門衛、宮に仕えるしもべたちは、自分たちのもとの町々に住みつき、すべてのイスラエル人は、自分たちのもとの町々に住みついた。

捕囚として異国の地に住んでも、それが慣れてくると去りづらくなるものです。みこころは別にあると知りつつ、今の生活を変えたくない人と多くいたでしょう。しかし彼らは、神様が約束して与えてくださった地に住んで、信仰を守ることとそのために神殿を再建するという苦勞を選びました。主はその1人1人を覚えてくださいました。数万人の人名を記すことは不可能ですが、1人1人が数えられるほどに、主は大切に思ってくださいますのです。

主のみこころのためにリスクを負うものを、主は決して忘れないで、祝福の対象としていてくださることを忘れないようにしましょう。

家系や血統が明らかであるというのは、自分が神の民であるということですが、この旧約時代の救いは民族的なもので限定されていましたから、家系や血統ですが、今の新約時代は主イエスを信じる信仰によって、神の民とされます。自分が何ものであるのか、神の民であるのかどうか「見つからない」などということがないように、神の国の歩みをしましょう。やがて神のときが来て、クリスチャンが召し出されるときに、「職を果たす資格がない」などということがないように、今あることの使命を忘れないようにしましょう。

- ① 神のみこころは？
- ② どんな思いになりましたか？
- ③ 生き方により適用しますか？
- ④ この世にあって何を実践しますか？



3:1 イスラエル人は自分たちの町々にいたが、第七の月が近づくと、民はいっせいにエルサレムに集まって来た。

3:2 そこで、エホツァダクの子ヨシュアとその兄弟の祭司たち、またシェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちは、神の人モーセの律法に書かれているとおり、全焼のいけにえをささげるために、こぞってイスラエルの神の祭壇を築いた。

3:3 彼らは回りの国々の民を恐れていたので、祭壇をもとの所に設けた。彼らはその上で主に全焼のいけにえ、すなわち、朝ごと夕ごとの全焼のいけにえをささげた。

3:4 彼らは、書かれているとおりに仮庵の祭りを祝い、毎日の分として定められた数にしたがって、日々の全焼のいけにえをささげた。

3:5 その後、常供の全焼のいけにえと、新月の祭りのいけにえと、主の例祭のすべての聖なるささげ物、それからめいめいが喜んで進んでささげるささげ物を主にささげた。

3:6 彼らは第七の月の第一日から全焼のいけにえを主にささげ始めたが、主の神殿の礎はまだ据えられていなかった。

3:7 彼らは石切り工や木工には金を与え、シドンとツロの人々には食べ物や飲み物や油を与えた。それはペルシヤの王クロスが与えた許可によって、レバノンから海路、ヤフォに杉材を運ぶためであった。

3:8 彼らがエルサレムにある神の宮のところに着いた翌年の第二の月に、シェアルティエルの子ゼルバベルと、エホツァダクの子ヨシュアと、その他の兄弟たちの祭司とレビ人たち、および捕囚からエルサレムに帰って来

たすべての人々は、主の宮の工事を指揮するために二十歳以上のレビ人を立てて工事を始めた。

3:9 こうして、ユダヤ人ヨシュアと、その子、その兄弟たち、カデミエルと、その子たちは、一致して立ち、神の宮の工事をする者を指揮した。レビ人ヘナダデの一族と、その子、その兄弟たちもそうした。

3:10 建築師たちが主の神殿の礎を据えたとき、イスラエルの王ダビデの規定によって主を賛美するために、祭服を着た祭司たちはラツパを持ち、アサフの子らのレビ人たちはシンバルを持って出て来た。

3:11 そして、彼らは主を賛美し、感謝しながら、互いに、「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに。」と歌い合った。こうして、主の宮の礎が据えられたので、民はみな、主を賛美して大声で喜び叫んだ。

3:12 しかし、祭司、レビ人、一族のかしらたちのうち、最初の宮を見たことのある多くの老人たちは、彼らの目の前でこの宮の基が据えられたとき、大声をあげて泣いた。一方、ほかの多くの人々は喜びにあふれて声を張り上げた。

3:13 そのため、だれも喜びの叫び声と民の泣き声とを区別することができなかった。民が大声をあげて喜び叫んだので、その声は遠い所まで聞こえた。

イスラエル人は神殿再建に当たって、まず神を礼拝しました。過去・現在・未来にわたって神様がことを行ってくれるのだからです。それも「律法に書かれているとおりに」行いました。人間の都合ではないからです。

また「恐れ」があるからこそ、祭壇でいけによって、神様への信仰をささげました。私たちも神の守りこそが安心であるという信仰を実践しましょう。

再建の喜びとともに、かつての滅びと神殿の規模の小ささで泣くものもありました。現実には複雑なものです。主のご計画に向かって前進しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

